

2021年11月7日 主日礼拝

説教題「見よ、主の日が来る」ゼカリヤ書 14 章 1～9、20～21 節

主任牧師 加藤 誠

**「見よ、主の日が来る。かすめ取られたあなたのものが／あなたの中で分けられる日が」。  
「その日は、主にのみ知られている。そのときは昼もなければ、夜もなく、夕べになっても光がある」  
(ゼカリヤ書 14 章1節、7 節)**

先週は分散礼拝という形ではありましたが、新しい礼拝堂の献堂感謝礼拝を共にささげることができて嬉しい主の日となりました。ところで、教会ではなぜ日曜日のことを「主の日」「主日」と呼ぶのでしょうか。

主イエスの時代、イスラエルの人々は預言者たちが語る「主の日」の到来を今か今かと待ち望んでいました。今朝のゼカリヤ書も「主の日」の到来を告げている預言書です。「見よ、主の日が来る」。そこで「主の日」は「神さまの正義が実現する日」として紹介されています。神さまの御心に反して人間たちが捻じ曲げてきた「偽りの正義」が正されて、不当な苦しみや悲しみを受けてきた人たちに笑顔と安らぎが戻る日のこと。「かすめ取られていたあなたのものが、あなたの中で分けられる日が来る！」(1 節)。「かすめ取られたもの」とはダマされ盗まれてしまったもの。例えば今ミャンマーでは国軍の不当な暴力によって家を火で焼かれ、愛する家族を刑務所に入れられ、拷問で殺されてしまう痛ましい出来事が起こっていますが、その「かすめ取られていた家や愛する家族」が神さまによって取り戻され、涙に暮れていた人たちに笑顔と安らぎが戻される日。それが「主の日」です。

それは逆に言えば、神さまをあなどり、神さまの御心を踏みにじて大きな顔をしていた人びとが、神さまの正義の前に青ざめ、ひれ伏し、小さくされることを意味します。神さまの正義が実現する日は、神さまの裁きが実現する日でもあるのです。ですから今日のゼカリヤ書 14 章の前半も、まずエルサレムの都への厳しい神さまの裁きが語られ、エルサレムの中から神の御心を踏みにじる邪悪なもの、不信仰が取り除かれた後に、神さまによる平和がもたらされて、世界中から礼拝する人々がエルサレムに上って来るというビジョンが語られていくのです。

このユダヤ教の人たちが今か今かと待ち望んでいた「主の日」は「イエス・キリストにおいて実現した！」と新約の人びとは理解しました。主イエスにおいて「神さまの正義と平和がはっきりと示され実現した！」と受け止めたのです。特に主イエスは、その復活を通して、御自分を十字架につけた者たちの不正義、邪悪に対して愛をもって勝利されました。旧約聖書では不正な暴力に対して神さまの正義の暴力が打ち勝っていきますが、新約聖書は違います。暴力の不正義に対して主イエスの愛と祈りが勝利する。その主イエスの愛と祈りの勝利が示された復活の日曜日を、初代教会のクリスチャンたちは「主の日」と呼ぶようになったのです。

ただ、その主イエスの愛と祈りが勝利は、まだ多くの人たちの目には隠されています。「ほんとうにイエス・キリストが復活して神さまの正義が実現したの?」「そ

んな神さまの勝利がこの世界のどこにあるの？」「ほんとうに神さまなんているの？」。クリスチャンさえ「神さま、ほんとうにあなたは生きて働いておられるのですか？」と分からなくなるような出来事が毎日のように世界や日本で起こっています。それに対して新約聖書は「今はまだ分からないことがたくさんあるけれど、やがて必ずすべての人に主イエスの愛と祈りの勝利がはっきり見える日が来る。それは主イエスが再び来られる「主の日」。その「主の日」の希望に向かって歩いていこう！と、私たちに語りかけるのです。新約聖書の最後、ヨハネ黙示録の一番最後にこう記されています。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください」（黙示録 22 章 20 節）。復活の主イエスは、肉の目には見えない形で私たちと今も一緒に歩んでくださっているけれど、やがて世界中の人にはっきりと見える形で姿を見せてくださる。その「主の日」に向かって神さまを礼拝しつつ歩もう！と、聖書は私たちに語りかけているのです。

その意味で、今朝ご一緒に開いたゼカリヤ書 14 章も、いずれ必ず来る「主の日」のビジョンを私たちに示してくれています。その日は「夕べになっても光がある」（7 節）不思議な日です。どんなに暗闇で覆われても神さまの希望の灯は決して消えないのです。またその日は「あらゆる国から残りの者が皆、エルサレムに向かって神さまを礼拝し喜び祝うために上って来る日」（16 節）です。世界中の至るところから、さまざまな困難と苦しみを克服した「残りの者」が賛美を携えて集まってくるのです。そして「馬の鈴にも『主に聖別されたもの』と銘が打たれる日」（20 節）。「馬」は異教徒の力の象徴と考えられて、エルサレム神殿に決して入ることができなかつたものですが、その「馬の鈴」も「主に聖別されたもの」として神さまに用いられるのです。今まで「あれはダメ、こんな人はダメ」と、人と人との間に引かれていた「線」が神さまの前ではなくなる日。それがゼカリヤ書が私たちに指し示している「主の日」です。

アメリカで黒人の解放を祈り、非暴力抵抗運動を指導した M・L・キング牧師は「私には夢がある」という説教において「主の日」のビジョンを語りました。「私は同胞達に伝えたい。今日の、そして明日の困難に直面してはいても、私にはなお夢がある。将来、この国が立ち上がり、『すべての人間は平等である』というこの国の信条を真実にする日が来るという夢が。私には夢がある。ジョージアの赤色の丘の上で、かつての奴隷の子孫とかつての奴隷主の子孫が同胞として同じテーブルにつく日が来るという夢が。私には夢がある。今、差別と抑圧の熱がうずまくミシシッピ州でさえ、自由と正義のオアシスに生まれ変わり得る日が来るという夢が。私には夢がある。私の四人の小さい子ども達が、肌の色ではなく、内なる人格で評価される国に住める日がいつか来るという夢が」と。

私たちが「主の日」に礼拝に集うのは、神さまの「主の日」のビジョンをいただいくためです。いろいろな暗さに覆われている世界の中ですけれども、ゼカリヤが語った「主の日」や、キング牧師が語った「主の日」の夢を、御言葉からいただいて歩いていきたいのです。